

幕末朝廷の摩訶不可思議

高田 友

幕末朝廷の貴顯に紛れもなき佐幕派の首魁あり。關白にあらず、攝政にあらず、はたまた清華（藤原氏の摂關家に次ぐ家柄）にもあらず。すなはち人皇第二百一十代孝明天皇その儀にておはします。

忠君の志八洲に冠たる長州の如きは、「現御神御自ら國政を擔ひたまふこそ君國の道理たれ」と唱ふれども、至尊何條さは思召さるるの儀あらん。神州開闢より二千五百有餘年、主上親しく權柄を取らせ給ひしは後醍醐帝以降は悉皆其の例を見ずと言ふとも過言にはあらざらん。然則、皇家には政治のノウハウを蓄積せらるるの條無之、今さら政治に淬めと言はれんとも、誰にか教へを乞ふべき。大政は幕府に委任し、大自らは洛中紫宸殿にて只管皇祖皇宗の神靈照鑑を祈らんとの叡慮にておはします。これすなはち、公武合體の眞實にして、これが爲に皇妹和宮降嫁せられたまふに至る。

世人、徳川慶喜は孝明帝に國家統治の大權を還し奉りしと誤解する者多し。さにあらず、孝明天皇は慶應二年（一八六六）暮に兩御あらせられ、翌一月睦仁親王踐祚ありて、明治天皇とならせ給ふ。新帝なればこそ、慶喜の奉還も嘉納あらせられたりけめ。孝明帝在世しておはしまししかば、大政奉還も明治維新も争か成就すべかりし。

長州毛利家は台閣に近侍して朝政を壟斷してありしが、往んぬる文久三年（一八六三）、八月十八日の政變にて宮中より驅逐せらる。しかうして、翌年七月、大擧して長州より上洛、禁門の變（蛤御門の戰）によりて形勢挽回せんと欲するも、幕府・薩摩・會津の聯合軍の爲に鎮壓せらる。

この時に方りて、孝明帝、敕諭を渙發せられ、「長州兵は入洛すべからず」と仰せたまひき。然而、長州は、「君側の奸を除かん」と強辯して、承諾必謹の大義を滅却、敢へて皇宮に來襲す。然りと雖も彼我の衆寡懸隔して、長州兵一敗地に塗れ、落魄の身を以て西海へ落ち行く。帝逆鱗鎮まらせたまふに由なく、大樹家茂に詔して宣はく、「毛利の不義不忠、争でか宥恕するを得ん。汝家茂、薩摩と合力して、長州に懲戒を下すべし」と。かくして、第一次長州征伐とはなりたりけり。因みに、聖上鍾愛あらせられし臣下は、一に松平容保、二に徳川家茂なりしとぞ傳へらるる。

世人以爲、長州と薩摩と相提携して幕府に抗し、朝廷これを嘉したまへりと。さにあらず、當初は、長州單獨にて倒幕を企て、薩摩・會津は幕府に與して長州を撃たんと欲す。而して、これこそ孝明帝聖旨の然らしむる所なれ。第二次長州征伐の砌に、坂本龍馬の馳走に由り薩長密約相成つて、漸く倒幕の爲に會盟す。

歴史の意外性とは寔に此の如きの謂ひにして、心底、眼より鱗の落つる心地せであるべしや。

（令和二年一月二十七日受附）